

2月号

昭和61年2月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

あじさいの芽に
霜がまつ白だ。
あじさいの芽に
霜がまつ白だ。
寒中の厳しい冷氣に耐えて
じつと動かない芽。
どの枝先にも
枝のつけねにも途中にも
たがいちがいについている芽。
やがて来る春を
ぬくぬくした日さしを待つて
じつと耐えている。

この厳しさを耐えぬけば
もう春。
早く來い。
その日は近い。



(あじさいの里づくりー福岡中)

私はいわゆるクラシック音楽が好きである。好きという言葉では不十分で「中毒している」とでもいわべきだろうか。ともかく音楽なしには暮らしていくこと自体がないような生活である。

と呼ばれて、片隅に追いやられていたものである。

— 教育隨想 —

「音楽」と「唱歌

岡田節人



現在でも、学校教育では音楽や美術などは、ごく軽いウエイトしか置かれていないのではないかと少し気になる。その理由は、もちろん昔とは違つていて、受験に関係のない学科目だからだらうということである。

ペートーベンのシンフォニーなどを演奏してみせるので、ただただ驚く。受験に関係ない——但し一部のプロ志願者がその道の大学を受験する場合を除く——音楽においてさえこのような活躍ぶりで、当今の子供たちのエネルギーに敬服するし、それに音楽という科目においても、受験技術の向上などと無関係のところで、よほど優れた教育システムが定着しつつあるのだろうと察せられて、

誠に頼もしい。

しかしながら、これらをより積極的に広めて、将来的のプロ候補者、あるいは一部の特別な興味を持つ層だけではなく、一人でも多くの子供たちが、美術や音楽の持つ「美」というものに対する良き感受性を養成できるような教育であって欲しいと思うのである。

世は科学技術の時代である。それが進み過ぎるという批判はあっても、何人もその進歩を人為的に止めることはできな。教育においても、科学技術の進歩に遅れぬよう、なんらの意味でもその道を推進できる人材の養成が急務となる。このことにブレーキを掛けることは不可能であるし、ブレーキを掛けること自体、知性的否定につながる面がある。

そのような時代であり、近い将来にこのことが急転換する可能性はあるようにも思えないとすれば、それと対極にあるような芸術・音楽が人間生活にもつ比重は、相対的バランスをもつて重くならなければならぬ。

そのような見地から、今日、学校教育における美術や音楽の持つ意義は、とりわけ重要な責任があることのようにも思う。「入試に関係がない」という理由で軽んじられるようであれば、将来に悔いを残すものとしかいいようがない。

そのような時代であり、近い将来にこのことが急転換する可能性はあるようにも思えない」とすれば、それと対極にあるような芸術・音楽が人間生活にもつ比重は、相対的バランスをもつて重くならなければならぬ。

そのような見地から、今日、学校教育における美術や音楽の持つ意義は、とりわけ重要な責任があることのように思う。「入試に関係がない」という理由で軽んじられるようであれば、将来に悔いを残すものとしかいよいのがない。

世は科学技術の時代である。それが進歩するに過ぎないと、その批判はあつても、何人も止めることはできない。教育においても、科学技術の進歩に遅れぬよう、なんらの意味でもその道を推進できる人材の養成が急務となる。このことにブレーイキを掛けることは不可能であるし、ブレーイキを掛けること自体、知性の否定につながる面がある。

学校活動の支え

矢作東小学校長

伊
汎



性は、大きく進展し、学級經營から人間づくりまで、幅の広い教育活動が生まれてくる。

一校文集を全校活動として、文集づくりに励んでいる。各学級にふさわしい文集名を付けて、一週間に一枚、ガリ版印刷で発行する。毎日作文タイムで書きまくる。材料は豊富である。二十六学級もあると、担任の個性が出てくる。表現力、創造性など、この一枚文集に結集さ

性は、大きく進展し、学級經營から人間づくりまで、幅の広い教育活動が生まれてくる。

一校文集を全校活動として、文集づくりに励んでいる。各学級にふさわしい文集名を付けて、一週間に一枚、ガリ版印刷で発行する。毎日作文タイムで書きまくる。材料は豊富である。二十六学級もあると、担任の個性が出てくる。表現力、創造性など、この一枚文集に結集さ

ふるさとシリーズ

—この人に聞く—



永年勤続校医

川瀬 志郎 氏

本年度、市より永年勤続校医として表彰をうけられた川瀬さんを、名鉄美合駅北西百メートルにある自宅にお訪ねした。

「私がはじめて校医になつたのは、昭和三十三年のことです。当時は額田郡で仕事をしていましてね。形埜小学校の校医でした。昭和三十九年にこちらに来て、竜谷小学校と河合中学校の校医になつたんです。」

隣りでは小児科医でもある奥さんの美子さんは、御主人の一言一言に、いつも相づちを打たれる。

「御承知の通り、私が学校にお邪魔するのには、定期の健康診断のほか、マラン

もたちの体位は向上しているものの、体力や骨は弱くなっているという。

「私が開業医で忙しいということで、学校から特別に御相談を受けることはあまりありませんが、事実、学校では養護の先生を中心に大変よく健康管理に努めています。ただ、欲を申しますと、こんなことを思います。一つは、学校の健康目標が全学年を通して一的になつてはいいのかということです。どの学年も歯をしっかりと磨くとか、ハンカチやちり紙を忘れないといふことになつてしまふ。学年段階に合わせた目標がもつとあつてもいいのではないかと思います。もう一つは、視診や聴診だけによる診断には限界があるということです。幸い、近年腎臓検診に統一化された心電図検査も行なわれますので、異常のあつた者については十分に注意して観察を続けていくべきだ

といふことです。」

川瀬さんは診察室から、子どもたちや母親をどのようにみておられるだろうか。

「昔とくらべると、ささいなことでもいとも簡単にどうすればよいかと問い合わせてくるんですね。たとえば、どん

な大会などの臨時の健康診断や就学児童の健診の時ですね。それに、学期一回開かれる学校保健委員会にも出席させていただいて、子どもさんやおかあさん方にお話をさせていただいています。」

川瀬さんのお話によると、確かに子どもたちの体位は向上しているものの、体力や骨は弱くなっているという。

「私が開業医で忙しいということで、学校から特別に御相談を受けることはあまりありませんが、事実、学校では養護の先生を中心に大変よく健康管理に努めています。ただ、欲を申しますと、こんなことを思います。一つは、学校の健康目標が全学年を通して一的になつてはいいのかということです。どの学年も歯をしっかりと磨くとか、ハンカチやちり紙を忘れないといふことになつてしまふ。学年段階に合わせた目標がもつとあつてもいいのではないかと思います。もう一つは、視診や聴診だけによる診断には限界がある

ことがあります。大事なことはまず親が後ろ姿で教えてやることですよ。」

(住 所) 岡崎市美合町生田一〇八
(生年月日) 大正十五年三月二十五日



な症状になつたら学校を休ませればいいか、親が判断すべきことでも電話してきます。

それと、親としてなすべきしつけができるなくなつていませんか。待合室の雑誌を破つたのを見ても注意しない。

ことば遣いが乱れていても一向に感じない。私が古いのかもしませんが、教育とかしつけというのは、もつときめ細かになされるものではないでしょうかね。非行に走つたりする子は中学生になつて急になるのではなく、幼い時にすでにそういう芽があったのではなかと思います。大事なことはまず親が後ろ姿で教えてやることですよ。」

今は「通信」づくりが盛んである。日刊で発行し、学級や学年の経営に効果を挙げている例が身近にある。工夫次第では十分「文集」的なよきが發揮できよう。しかし、一般的に伝達・連絡用になる。紙面が類型的で軽易な感じになる。時に子どもの文章を採り上げても、断片的、補助的になり易いなどの弊がないわけではない。だから通信の機能を高めるためにも、併せて「文集」が欲しい。

文集の代表的なものは、やはり「学級文集」であろう。学級の子どもの生活や考え方や表現が息づいている文集。担任の熱意が編集にも生かされた個性的な文集。さらには、かけがえのない生きた教材として見方、考え方を育てる、そういう学級文集が欲しいのである。

学級文集をめぐる課題は多い。だからなさら子どもの表現や姿勢に学ばねばならない。それも、稚拙さや未熟さをいとおしむ心がないと文集が形骸化する。

文集は国語教師の占有物ではない。多くの教室で文集づくりの活動が盛んになると、教師もまた大いに成長するのだ。

南中学校長

中根 清巳

ハートピア岡崎

— 開設この1年 —



信頼関係をつくる

— 支援の出発点 —

ハートピア岡崎が担当している児童・生徒は、現在三十一名である。学校へ行く意志はあるものの、精神的負担が大きくて行けないという子たちである。当然、ハートピア岡崎にも行きたくないという引け目を持っている。

ハートピア岡崎に勤務する所員は、藤井所長はじめ、相談員三名、事務および運転手一名の計五名である。所員の方々の取り組みは、ひとりひとりを理解し、信頼関係をつくることからはじまる。そして何よりも「ことば」に留意する。子どもを生かすも殺すもことば一つにある

親の中には、「この子の悩みや焦りを何とかして取り払ってやりたい」という願いよりも、「ここへ来れば、卒業資格が得られるのではないか」という思いを優先させてしまう人もいる。通所することを強制しても効果は薄い。あくまでも本人の自覚で来るようになると、所員の方々は支援する。

指導を工夫する

— マンツーマン方式 —

登校拒否児は、学校を象徴する物をいき受けつけない。「先生」「教科書」「黒板」「宿題」、こんなことばを使うことは通所初期の子には御法度である。施設・設備は、いたるところで工夫が

なされている。室内はカーテンや壁の色にも心配りがなされ、教室というよりは子どもたちの城といったあたたかい雰囲気をもっている。机は、子どもと対面しないようにL字型に配置され、話し合いやすいようになっている。つい立ても工夫がみられ、床との透き間がない。隣からぞれられないという安心感を持たせるためである。また、所内のあちこちは、所員の方々による手づくりの飾りつけがみられる。

子どもたちはマンツーマン方式で対応する。藤井所長自身も現在六名受け持っている。所内では技術家庭科を中心とする実践的活動に力点が置かれている。ゴーカートの運転や卓球をすることもできる。周囲の自然的条件を生かして畑作業や野鳥観察、魚つりをすることもある。また、市立図書館や家康館に出かけることもある。どの場合にも共通して言えることは、所員の方々が子どもと共に行動していることである。そして、ひとりひとりに合った教材や教具を所員の方々が手探りで見つけ、つくつてることである。

自宅から出ない子どもには、家庭訪問を重ねる。教えたり指導したりするというのではなく、まずよき聞き相手になることである。電話訪問十回よりも、家庭訪問の方が多い。はるかに意味がある。手紙訪問をすることもある。「人間は気持ちが大事」という内容の手紙を書いたことによって、通所するきっかけを得た。

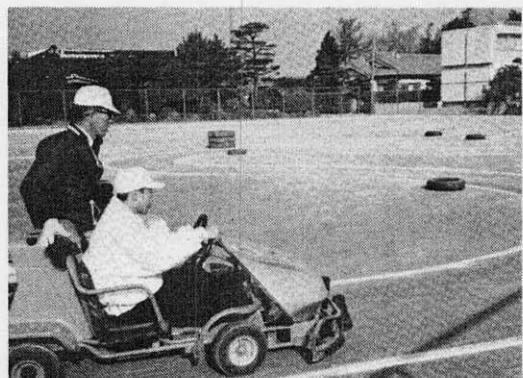
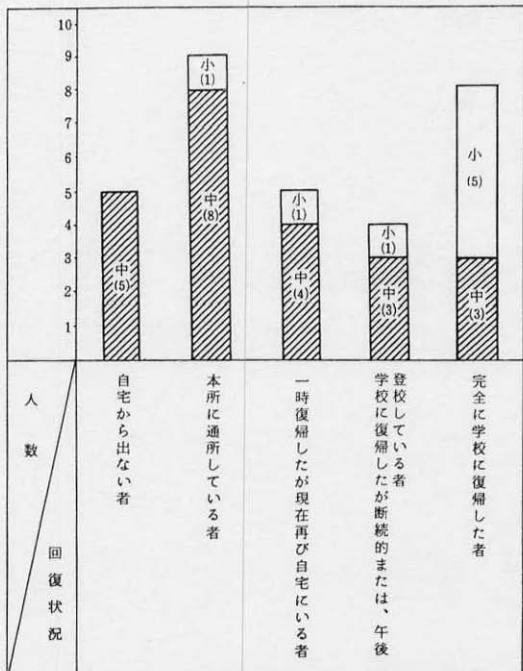
ハートピア岡崎は、昭和六十年五月、市内上衣文町にある「岡崎市働く者の山の家」内に開設された。この開設の目的は、市内の小・中学校の児童・生徒のうちで登校拒否をしている者、またはその傾向を有している者および、その保護者に対する適正な相談、助言および指導を行うことによって、学校復帰を図り、学校教育の援助に寄与することにある。

ハートピア岡崎を訪ね、藤井清所長さ

ハートピア岡崎担当の児童・生徒

回復状況人数調べ

(昭和61年1月21日現在)



つかんだ子どももいる。家庭訪問と手紙訪問を四か月間続けることによって、はじめて通所の微候が出はじめた子どももいる。

(中三のCさんの場合)

とりひとりによつて取り組みの反応は違つてくる。ただ、一般的にいえば三ヶ月から四か月たつと変化が出てくるという。

学校に復帰する

一 学校と連携

子どものまでも今までいいとは思つてはいない。何かのきっかけがあれば変革したいと願つてゐる。八人の子どもはそのきっかけをつかみ、学校に帰つていつた。四人の子どもは、学校で半日過ごすことができた。逆にまだ自宅から出ない子どもも五人いる。

効果のあらわれは十人十色であり、ひ

ハートピアから学ぶ

一 教師のかまえの再認識

登校拒否になつた要因は一つでなく、いくつかが絡みあつてゐる。家庭での手塩のかけ方にも大きな問題がある。しかし、学校がその火種に点火してゐることも確かのようである。私たちは何よりも、日々実践の中で子どもを見つけていかねばならない。

ハートピア岡崎での営みは、そのまま入れ体制と担任の熱意によつて、復帰の度合も大きく変わつてくるという。「ハートピア児童・生徒担任懇談会」を開いたり、学校訪問などして、復帰のための条件整備をはかる。特別扱いをしないこと

以後、毎日通所中

二 月曜日

一月十八日

五月十八日

九月二十四日

十月通所日数

十一月通所日数

十二月通所日数

一月通所日数

二月通所日数

三月通所日数

四月通所日数

五月通所日数

六月通所日数

七月通所日数

八月通所日数

九月通所日数

十月通所日数

十一月通所日数

一二月通所日数

受付そして相談開始

（中二のB君の場合）

以後、一週間に一回登校

学校と連携が不可欠である。学校の受け

入れ体制と担任の熱意によつて、復帰の度合も大きく変わつてくるという。

「学校とは」「教師とは」という根源的な問いかけへの、一つの答えに通じていよいよ思えてならない。

子どものやさしさ

奥殿小 藤井良一

にわとりが死にそうだと
血だらけのにわとりを
服の汚れも気にせずに
大事に抱きかかえる子ども。

鳥の墓を

一生懸命に掘る子ども。
墓の上に

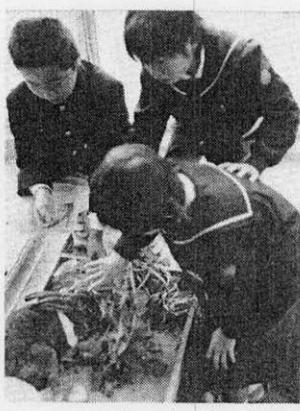
犬よけの葉もつきさして。

子どもの子どもらしい
やさしさって何だろうか。

私は自分に問いかける。

「先生、にわとりが死にそうだ
よ。」

朝、職員室に入ろうとする私
の足を止めたのは、そんな子どもたちの声だった。



子どもたちと共に急いで飼育

葉を墓の上につきさしてやつた
のだ。

だ。

五月末の修学旅行。彼女自身
もそれをきっかけとして学校に
行けるようにしたいと願つてい

みんなの気持ちが通じたのか
十一月十七日の文化祭にM子は
顔を見せた。実に半年ぶりに。
しかし、それもたつた一日。

「M子の心には学校に行けない
何かがあるんだ」——私の言

葉にうなずくM子。でも、それ

を話してはくれない。ただ「自

分なりに解決できるか」との問

いにはゆつくりうなずいた。

十二月二十日。ついに四十五

人の顔がそろった。「みんなす
ごくはしゃいでいた。まるで小

学生のようだ」とS男は書いて

いる。担任のO先生、私の顔も

ゆるみつ放しだった。次の日も

次の月曜日も四十五人だつた。

そして、一九八六年一月八日。

最後の学期を四十五人は迎えた。

M子の顔がそろつた——これは
45の顔がそろつた——M子のいすを見て、「自分も含

めて一体何人が本当にM子のこ

とを考えているのだろう」と考

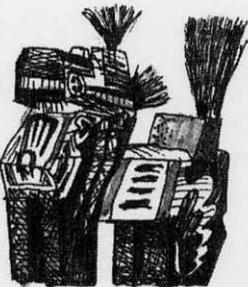
えこんだF子。「M子のスリッ

パを見たらほこりがたまつてい

た……」と生活の計画に書いてき

たS男。そして、そのほこりを

人知れずそつとぬぐつたS子。



45の顔がそろつた

竜海中 織田妃子



45の顔がそろつた

通信「精一杯」の見出しだ。

十二月二十日の三年二組の学級

通信「精一杯」の見出しだ。

四月、担任O先生、副担任、

生徒四十五名でスタートした二

組だが、五月のゴルデンウイ

ークを過ぎるとM子の顔が教室

から消えた。いわゆる登校拒否

よようと、先の尖つた

K男と数人の子どもたちが二
階のベランダで死んでいたヒヨ
ドリを職員室に持つて来たこと
があつた。気持ちのいいもので
はないので、

「お墓を作つて、埋め
てやれよ。」

とだけ言って、K男に

持つて行かせた。そう

すると、K男たちは、

供養塚の近くに穴を掘
り、犬に荒らされない

ようなど、先の尖つた

